

日本の新宗教の組織的展開 ①

筆者は、前号までブラジルにおける宗教風土のありようについて述べてきた。それは、本連載執筆のねらいである、日本の新宗教（天理教、パーフェクトリバティ教団、生長の家）がブラジルで展開する宗教的土壌を理解するために他ならない。というのも、それらの新宗教に入信した人々は、カトリシズム、プロテスタンティズム、カルデシズム、アフロブラジリアン宗教といった宗教を遍歴して改宗している場合が多く、以前の宗教との比較において日本の新宗教の教えや実践の違いを受け止めていることがしばしばみられるからである。今号からは、そのようなマイクロレベルの議論に立ち入る前に、数回にわたって日本の新宗教のブラジルにおける組織的展開について述べることにする。

天理教のブラジル伝道

天理教は、「世界たすけ」を標榜して積極的に海外で活動を展開してきた。教団が一派独立した翌年の1908年には韓国布教管理所を置き、1910年の日韓併合の翌年には朝鮮布教管理所を設置するというように、日本の植民地政策や海外移住政策に合わせながらも独自の発展を遂げてきた。

1926年（大正15）に行われた教祖四十年祭当時、教団では海外布教を積極的に行おうとする気分が盛り上がっていた。それは立教以来、75年たてば日本国中、天理教の道はあちらこちらに広まり、それから先は世界隅から隅まで天理王命の神名を流す、という意味の神意が伝えられ、布教意欲を支えていたからである。それは、教祖四十年祭を目指した教会倍加運動という、1920年代前半における国内での爆発的な教勢拡大による布教の高揚にもみられた。1926年にはまた、海外布教を目指す若者を養成することを目的に天理外国語学校が設立され、その翌年、教会本部に海外伝道部が設置された。そして、1932年から満州に「天理村」が建設され、教会本部主導による「集団移住型」の海外布教が開始されるようになった。日本の新宗教の布教形態で「集団移住型」はあまり例がない。単身をも含めた移住による布教という形態は、天理教の一つの特徴といえるだろう。

日本人のブラジル移住は1908年（明治41）に始まったが、天理教では1929年（昭和4）に行われた天理教南海大教会による集団移住が特筆される。同大教会では和歌山県海外移住組合の南米移住計画を利用して、サンパウロ州西部奥地にあるチエテ植民地に4家族を送りこんだ。そのなかに後に初代伝道庁長となった大竹忠治郎の家族もあった。森林を農耕地に開墾することから始まった植民地での生活は水や食料にも苦心するほどで、積極的な布教にまでは及ばない状態だった。しかし、入植した翌年には、信徒集団「正明会」が結成され、毎月26日に月次祭が、他に日を決めて教義研究やおてふりの練習が行われるようになった。1931年、大竹忠治郎は妻子を植民地に残してパウルー市に単独布教に赴いた。パウルー市はサンパウロ州奥地へ向かう鉄道網の分岐点だったことから日本人移民が多く、布教地として相応しかったといえる。

なお、正明会の活動とは別に、大阪出身の根来善之助が1927年に渡伯していた。彼は1928年にサンパウロ州奥地のアラボンガスに田中筆吉と協力しておつとめをする場所を建設し、1935年にブラジル最初の教会となるノロエステ教会（北大教会系統）を設立した。根来らのように、南海大教会による集団移住以前から天理教信者の移住はみられた。しかし、そうした人々の多くは布教を目的としておらず互いに分散して生活を送っていた。大竹は未信者への布教を進める傍ら、そのようにして潜在していた信者らを発掘し、「ブラジルの道」に繋ぎ止めて行った。

1936年の教祖五十年祭には天理教の聖地「ぢば」への団参加が計画され、大竹忠治郎が中心となって呼びかけた。参加者は150名で、そのうち信者は23名だった。この年の「おぢばがえり」で、大竹が初代会長を務めたパウルー教会（南海大教会系統）、パウリスタ教会（南海大教会系統）、プロミッソン教会（中和大教会系統）、ペンナポリス教会（中和大教会系統）、マリリア教会（撫養大教会系統）が設立された。

伝道庁体制の組織化

大竹を中心として生まれたこのような活動は、後に伝道庁体制と呼ぶ組織に発展する。その歴史は、次のようにまとめることができるだろう。①ブラジル伝道の萌芽である単立教会形成期（1929年～1940年頃）、②伝道庁体制が整えられる伝道庁部内教会成立期（1940年頃～）、③新たな移民を受け入れた天理移民定着期（1960年頃～）、④多くの移民子弟が「ぢば」に留学するようになった天理移民子弟の育成期（1980年半ば頃～）、⑤移民子弟らがブラジルに戻って中心的な役割を果たすようになった天理移民子弟の時代（2000年頃～）。

単立教会形成期については上に記した通りだが、それ以降、新設教会は戦後の動乱が収束した1952年まで待たねばならなかった。しかし、その時期に伝道庁体制と呼ぶまとまりが生まれるようになっていた。1937年にブラジル政府が子供への外国語教育を禁止するなどナショナリスティックな政策を強めたが、そのような中であっても、大竹の担当するパウルー教会は神殿を建てて6カ所の部内布教所を生んでいる。それらの布教所は後に教会となり、ブラジル伝道庁体制の中核を担っていくことになる（伝道庁部内教会成立期）。なお、ブラジル伝道庁は1949年に天理教ブラジル布教管理所として設立され、1951年に名称が変更され伝道庁となった。

第二次大戦後、教祖70年祭（1956年）を迎えるに当たり、天理教海外伝道部がブラジル移住計画を進めることになった。第1回応募者5家族（31人）が1957年に渡伯し、伝道庁があるパウルー市近郊の農場に天理移民として配耕された。そして、1966年までに33家族（152人）、単独青年（29人）、呼び寄せ花嫁（3人）の計184名が移住した（天理移民定着期）。当初、パウルー教会や信者が所有する農場が配耕先に宛がわれていたが、手狭になったために教会本部が二つの農場（1万ヘクタール、16万ヘクタール）を購入した。天理移民らは後に農場を離れてサンパウロ市内などの都市部で生活するようになり、その中から25名の教会長が生まれている。

このように、ブラジルの天理教では新たな移民を受け入れることで布教活動を活性化させてきた。しかし、結果としてそれは天理教の「日系人化（ニホンジン化）」を維持・強化することにも繋がった。

一方、このような展開がブラジル天理教団としてのまとまりを生んだことも指摘しなければならない。すなわち、天理教では導きのオヤコ関係で結ばれた「系統」と呼ばれる教会群があり、教会本部には系統を代表する教会（大教会と呼ばれる教会が多い）を通して繋がっている。布教方針や信者指導は教会本部による主導を尊重するが、それぞれの「系統」の自立性は高い。しかし、ブラジルでは総じて「系統」を超えた繋がりが強いようにみえる。それは、伝道庁部内教会を中心に信者らが大战期の難局を乗り越え、戦後、ブラジル天理教団を活性化させた天理移民らが伝道庁という「記憶の共同体」を共有しているからだと思われる。